

「東京新聞」の「平和の俳句」11月に掲載された句から。「鳥威（おど）し言葉の壁を越えられず 村口宜史（46歳）」
 くいとうせいこう 田畑に大きな音をたてる鳥威し。もしも言葉で話しかけることができれば、あんなに脅威を押しつけることもなかろうに。平和黙考 > 鳥から作物を守るために鳥威しは必要であろう。安倍政権は北朝鮮の核とミサイルの脅威を煽り、「国難突破解散」と銘打って衆議院選挙をした。ミサイルは遥か上空を飛び越えたのに「アラート」を鳴らし、無意味な防衛姿勢を取らせ、電車も止めた。権力者は危機を煽って、自らを強化するのが常套手段である。北朝鮮は経済制裁によって民衆は極貧の状態にある。日本はアジアの植民地化を咎められ、国際的な経済的な締め付けを受け、戦争へと暴走した。北朝鮮をそうさせてはならない。人間は言葉を持っている。言葉を交わし、平和への道筋をつけることが理性ある人間のなすべきことではないか。

「最強の一手は『対話』秋の声 荒井孚（まこと）（81歳）」
 くいとうせいこう 暴力ではどちらが勝っても次世代に恨みが残る、それがまた暴力を生む。人類は歴史を学んでその不毛を知ったのではないか。対話を。> 主イエスは、一人の弟子が捕らえに来たエルサレム神殿の衛兵の耳を切り落とした時、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」と言われた。太古の昔から、武力で立つ者は武力で倒されてきた。それを知りながら、変わらず、武力で立とうとする。歴史に学ばない人間の愚かさである。しかし、コスタリカは武器を放棄し、近隣諸国との平和を実現している。教育、福祉は充実していると聞く。コスタリカに倣う国々が現れることを期待したい。

「この星のどの子もたと食べて秋 田中亜紀子（46歳）」
 くいとうせいこう 大きな願いだ。「たと食べる」ことのできない世界中の難民や貧困家庭の子供のことを悲しみ、祈る。その心が広がりますよう。> 韓国の詩人・金芝河は下記のような詩を書いている。「飯が天です 天を独りでは支えられぬように 飯はたがいに分かち合って食べるもの 飯が天です 天の星をともにみるように 飯はみんなと一緒に食べるもの 飯が天です 飯が口に入るとき 天を体に迎えます 飯が天です ああ 飯は みんながたがいに分かち食べるもの」。貧富の格差が是正され、飯を分かち合って食べ、天を体に迎え入れる時、平和が実現する。それを求め続けるのが、人間であることの証しである

「同盟は平和の枷ぞ鳥渡る 坪井利剛（71歳）」
 くいとうせいこう 日米同盟にのみしがみついていると、他の国際関係の可能性を失い、自国の危機にさらすと作者。自由に飛ぶ鳥に学べというのだろう。> 同盟は敵国を想定しているから結ぶのである。日米は、自由と民主主義を共通の価値観とする国として、強固な同盟を結んでいると、トランプ大統領と安倍首相は力説する。反対側に位置付けられた国々は緊張を高め、勢い軍備拡張に向かう。今の時代、戦争に勝者はいない。犠牲と悲しみ、そして、苦難が残るだけである。渡り鳥には国境はない。国境の壁を低くしていくことが、これからの国際政治ではないか。

「ウフフフ女独りの月見酒 岡本育子（73歳）」
 く黒田杏子 ご機嫌ですね。月見酒の盃を傾けて独酌。独吟。女独りの、ここがまたカッコイイ。ウフフフという俳句にも初めて出会いました。> 本当に楽しい人のようだ。こんな人と一緒に飲みたいものだ。一緒にイヤだとは言いますまい。独りでもいいが、一緒にもいいと言うに違いない。独りを楽しめる人はみんなとも喜びを共有できる。人に依存し、権威にぶら下がるのではなく、自立した者が真の連帯を作る。自立した市民の連帯が平和を生み出していく。